

AKITA Biz Forest

あきたBizフォレスト TOPインタビュー

TOP INTERVIEW

秋田テレビ株式会社

代表取締役社長 石塚 真人 氏

1953年8月7日秋田市河辺三内生まれ。秋田高校、立教大学法学部法学科を卒業後、ラジオ福島でのアナウンサー勤務を経て、1979年秋田テレビ入社。報道・制作畑を中心に50代からは営業局長、東京支社長を歴任。2011年取締役、2015年常務取締役。2018年より代表取締役社長。



まずは自分たちの強みを再確認することから

工藤 こんにちは。いつも多方面で大変お世話になっております。まずはあらためて石塚社長の略歴についてお聞かせください。

石塚 昭和28年8月7日、生まれは河辺の岩見三内です。三内小学校から秋田大学附属中学校に進みました。ちなみに私が生まれた昭和28年は、日本で初めて民間放送が始まった年、日本テレビが開局した年でもあります。

工藤 テレビ開局と同じ年とは、何か運命を感じますね。テレビマンになるために生まれてきたとか。笑。どんな少年時代でしたか？

石塚 小学校は野球部で中学校はバスケットボール部に所属。小学生の頃は父母の知人に連れられて毎年蔵王にスキーに行っていました。体を動かすことは全般的に好きでした。両親が2人とも教師で、現在102歳の母は教員を辞めてからも、華道や短歌など趣味も多彩で「100歳の歌人」というタイトルで魁さんのコラムに掲載していただきました。高校は秋田高校で、新聞部に入部しました。スポーツとはまた違う良い経験ができました。その後は立教大学法学部法学科に進み、ボブスレー同好会に所属しました。当時オリンピックが一番近いスポーツ!という誘い文句に乗ったのがきっかけでした。冬は札幌で合宿し、夏も蓼科で合宿し、ほかの大学の人たちと交流。新鮮で楽しい日々でした。今でも当時の仲間とは交流があり、毎年正月過ぎくらいに東京で集まります。数年前には秋田のお祭りに呼んだこともありました。大切な仲間たちです。

工藤 今でも集まれる仲間って素敵ですね。大学卒業後はどうでしょう。

石塚 卒業後はマスコミの世界へと思っていました。その準備としてアナウンスの専門学校に通い始めました。深夜放送の影響もありラジオ局を受験。ラジオ福島に拾ってもらい、3年間ラジオのアナウンサーとして勤めました。毎日1時間早く会社に行って、就業前に発声や発音の自主練を続けました。その後の私の人生にすごく役に立った3年間だったと思っています。でもアナウンサーという仕事に少し限界も感じていたころ、秋田テレビで放送記者を募集していて、運よく入社できました。放送記者として7年間勤めました。殺人事件や日本海中部地震など貴重な経験を積み重ねました。その後、会社都合でアナウンサーに復帰することになりました。色々な仕事をさせていただきましたが、ラジオ福島で鍛えてもらった経験がこの時に活かされ、本当にありがたい財産だと思えましたね。キャスター歴は5年くらいです。

工藤 最初は放送記者、その後はアナウンサー、イメージ的には、アナウンサーの方が社長になるのは、何となく珍しいケースなのかな?という印象なのですが、どの様な経緯で社長になられたのでしょうか？

石塚 たぶん、私のようなケースは少ないのかな?とは思いますが。アナウンサー以外にも、制作ディレクターをしたり、報道の部長をしたり、50代を迎えて営業局長、東京支社長などを経験させてもらいました。様々な部署や役員な

どもを経て、2018年に秋田テレビ社長に就任しました。

工藤 色々な役職を経て社長になられたんですね。ちなみに、現在経営者としてどのような課題をお感じですか？

石塚 どの放送局も一緒かもしれませんが、やはり「テレビ離れ」ということになりませんか。70年のテレビの歴史の中で、半世紀にわたり地上波は右肩あがりの発展を遂げ、「メディアの王様」に君臨しました。またその後はBSなども出現し、メディアの選択肢も広がる中、2000年以降は徐々にインターネットが普及し、いつしかテレビ離れが始まりました。テレビの優位性が低下する難しい時代の中で、インターネットをマイナス要因にとらえるのではなく、前向きに活用し、共存する方法を考えていきたいと思っています。秋田テレビでは、数年前から「テレビ、+（プラス）」を標語に掲げています。いち早くLINEニュースやアプリに情報をあげ、その情報をできるだけ速やかにテレビに誘導する。今後もYouTubeでの同時配信など、インターネットメディアをうまく融合させていけたらと思っています。我々の強みは、「テレビという電波を持つ、コンテンツメーカー」です。今は時代が大きく変わる転換点。だからこそオールドメディアになりつつあるテレビにも、やり方次第で可能性はまだまだあると信じています。ただどの業界でも、良き時代や成功の時代を過ぎた人ほど、新しい事を始めることや変化することに、後ろ向きになりがちです。で

あきたBIZフォレストTOPインタビューは、秋田の起業家と企業環境を応援することを宣言いただいた100名以上の経営者の皆様を中心に、起業家に役立つ話題と起業家へのメッセージを対談形式でまとめたものです。

も挑戦は必要不可欠。だからこそ挑戦するために、まずは自分たちの強みを再確認することが極めて大切だと思っています。

工藤 なるほど納得です。ところで最近「昔のテレビは面白かった」などよく言われます。私もテレビ全盛時代で育っているので、やはり少なからずそう思います。もちろん社会的に難しい要素は増えましたが…

石塚 そうですね。昔に比べて自由度が下がっているのは事実です。だからこそ「地域情報」をいかに伝えるかがテレビの最大の課題では?と思っています。地域情報をどう伝えていくか、そこにこそ「テレビ、+（プラス）」を考えていかなければならないところだと思っています。

工藤 なるほど。たしかに知人がテレビに出るとか、近所の話題などは、ついつい見たくになりますよね。話は変わりますが、秋田の経済の中

で、ポテンシャルやチャンスに感じていることはございますか？

石塚 今話題の風力を地域にどう活かせるか!でしょうか。人口減少問題や少子高齢化は秋田の課題ですが、短期間でこの課題を解消するのは至難の業です。そうした中で、風力発電を中心とした再生可能エネルギーは秋田にとってラストチャンスです。グリーンエネルギーを地域でどんどん活用していけたらいいですね。ちなみに秋田テレビでは、年に数回グリーンエネルギーやカーボンニュートラルを取り上げた番組を放送しています。秋田風力発電コンソーシアム「秋田風作戦」に参加する企業も増えています。どんどん興味を持つ人が増え、どんどん議論や行動が域内で活性化していったらいいです。大切なのは、それをどう地域の経済に結びつけていくか。そこにどれだけプレーヤーが生まれるかが大切だと思います。

固定観念にとらわれずに様々なチャレンジに繋がればいいですね。それを通じて雇用や交流人口も増え、結果として人口減少問題や少子高齢化という課題の解決につながることを期待します。

秋田は魅力的な近場温泉の宝庫

石塚社長の趣味は温泉巡り。もちろん国内県内各所の温泉も好きですけど、意外と近場の温泉やサウナが好きで、秋田は近場でも日帰りで簡単に行ける魅力的な温泉がたくさんあります。ポーッとできる時間は、やはりリフレッシュになりますね。「心身の健康は大切です」とのこと。

大病を患った経験のある石塚社長の言葉だからこそ重みもあります。

本日は貴重なお時間とお話しを本当に有難う御財増した。

インタビュー

合同会社ジェグルス(共同事業体ジェイワン) アントレプレナーコンシェルジュ 工藤 実

ライター J-MOTHERS 長内 ゆかり

企画 共同事業体ジェイワン(秋田市ビジネススタートアップ支援事業)

